

日本音楽芸術マネジメント学会 第12回夏の研究会  
Japanese Society for Musical Arts Management, *JaSMAM*

**After / With コロナ時代を生きる**  
～音楽で明日の社会をひらくために

論点のまとめ

2020年9月

## シンポジウム

### 「After / With コロナ時代を生きる ～音楽で明日の社会をひらくために」

2020年8月9日(日)15:00～17:30

オンライン開催(YouTubeで配信)

#### [登壇者]

- |      |                                     |
|------|-------------------------------------|
| 入山功一 | 一般社団法人日本クラシック音楽事業協会 会長              |
| 榎本剛  | 文化庁 政策課長                            |
| 鈴木順子 | 東京芸術劇場 事業企画課長 コンサートホール・ジェネラルマネージャー* |
| 平井俊邦 | 公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団 理事長            |

#### [モデレーター]

- |      |  |
|------|--|
| 中川俊宏 | 武蔵野音楽大学 教授・音楽総合学科長<br>／JaSMAM 副理事長、通信・広報委員長* |
|------|--|

#### [総合司会]

- |      |  |
|------|--|
| 石田麻子 | 昭和音楽大学オペラ研究所 教授／JaSMAM 理事、編集委員長*<br>※敬称略・五十音順／*は JaSMAM 会員 |
|------|--|

#### [プログラム]

- ①各分科会から報告
- ②基調報告(榎本剛 文化庁 政策課長)
- ③報告、パネルディスカッション
- ④質疑応答
- ⑤まとめ・おわりに

## 報告 [中川俊宏]

### ■ 2020 夏の研究会の位置づけ

本学会は、本年 4 月 16 日付で「新型コロナウイルス感染症拡大による舞台芸術分野への影響について」と題する要望書を文化庁に提出し、以下の 3 点の実施を求めた。

1. 舞台芸術関連の諸団体、企業等に対する支援
2. フリーランスの専門的な職能者に対する支援
3. 現場の要望を反映した施策の策定

今回の夏の研究会は、上記の 3 に挙げた「現場の要望」を汲み上げる場として位置づけられるものであり、有効な政策提言に生かすべく開催されたものである。

### ■ 舞台芸術分野の現状

#### 〈財政的な窮状〉

3 つの分科会(オーケストラ、アーティスト、劇場・音楽堂)において、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受ける各現場からの現状報告がなされ、改めて現下の厳しい状況が確認された。ことに公演中止や貸館休止による減収は各分野に致命的な財政的損失をあたえており、存続の危機に立たされている団体も見られる。

現在、公演活動の再開が進みつつあるものの、収容観客数には依然制限が設けられており、採算性を度外視した活動とならざるを得ない。また感染症が収束した後の集客にも懸念が持たれている。

#### 〈公演再開の状況〉

公演活動の再開を見据えて、各関係団体によるガイドラインが作成されており、実際にもそれらガイドラインを踏まえた念入りな感染予防対策が施された中で、各公演活動は慎重に進められているが、残念ながら出演者・スタッフ・観客から感染者を出してしまう事例も一部に生じている。演奏時のホール内における飛沫やエアロゾルの様態について、科学的な検証に基づく綿密なデータも収集されており、それらはガイドラインの根拠として生かされているが、予算的な制約もあり、全体としてはまだ十分な検証がなされているとは言い難い。

#### 〈映像配信への期待〉

公演活動が行えない状況の中、舞台芸術の各分野において映像配信への期待が高まって

おり、実際にもさまざまな取組みが試みられている。映像による作品の提供は、特に我が国のクラシック音楽の分野では、従来ほとんど必要性を認められてこなかったところであったが、ステージの代替物としてのみならず、新たな観客の創出や新たな音楽の楽しみ方を提案するものとして、感染症収束後も一定の意義を保ち続けるものと期待されている。文化庁の補正予算において、そうした活動の支援が可能となっており、積極的な活用を期待している旨のコメントがあった。

### 〈メンタル面での打撃〉

活動の場を失った演奏家、立案した企画を白紙に戻す文化施設スタッフなど、公演活動の中止は精神的な面においても関係者を苦しめる要因となっており、現場は無力感に襲われる傾向にある。また、寄付などに応じてくれる支援者もいる一方、舞台芸術に対する社会の理解について、平時には感じることのなかった疑念も生れており、各団体・各施設が社会と舞台芸術の関係について、改めて問い直す契機ともなっている。

## ■ 短期的課題(With コロナ時代の課題)

### 〈キャッシュフロー対策〉

公演活動の相次ぐ中止と席数制限での再開によって、芸術団体の収入は押しなべて激減しているが、オーケストラ団体などにおいては、人件費・事務所経費などの固定費の削減にはおのずから限界があり、財政的に極めて逼迫した状態にあり、このままでは資金繰りのショートや法人の解散が避けられない団体も少なからずある。このような最悪の事態を回避する方法の一つとして、一般企業に適用されている「資本金劣後ローン」を芸術団体にも導入し毀損したバランスシートの回復を図る案が提案された。

### 〈安全な公演環境のための科学的な検証〉

これまでに各団体・各施設が作成してきた公演再開のためのガイドラインは、それぞれの知見や情報の集積であり、安全な公演実施のためのよりどころとして大いに共有されることが望まれる。一方、飛沫やエアロゾルの動きは上演内容によっても異なり、施設の構造や設備によっても異なるため、医学的・工学的な専門家の参加を得るなど科学的な検証を積み上げていくことが期待される。しかしながら、適切な実験や計測にはそれ相当に経費も必要とされるため、現状ではデータ集積が思うように進められない状況にあることが報告された。

### 〈貸館収入の減少〉

劇場・音楽堂においては貸館業務の休止による大幅な減収が避けられない状況となっている。特に指定管理者となっている団体で利用料金制度を採用している施設にとっては、見込んでいた収入の多くが無に帰すわけであり、今後の運営に重大な影響を及ぼすことが案じられる。

### 〈フリーランスの実演家支援〉

文化庁の榎本剛政策課長より、超党派の国会議員や文化芸術団体からの声が寄せられることで、特にフリーランスの実演家等を支援するため今年度の第2次補正予算において「文化芸術・スポーツ活動の継続支援」(509 億円)が設けられており、第一次募集までに1万人強の申請があったが、第二次募集からは、より多くの方からの積極的な申請を期待する旨の呼びかけがあった。

## ■ 長期的課題(After コロナ時代の課題)

### 〈公益法人という組織形態の問題〉

舞台芸術関係の活動を行っている非営利団体の多くが公益財団法人という法人格を有しているが、現在のコロナ禍のような非常事態に陥った際、団体としての財務の脆弱さが露呈する結果となっており、公益財団法人という仕組みがはたして芸術関係団体にふさわしい組織形態であるのか、という疑念が生じている。これは、公益財団法人の内部留保が年間支出の30%を超えないことを基準とされていることに起因するものと思われるが、(内部留保が形成できるかどうかは別の話として)非常時を乗り切る組織の体力の確保という意味においては確かに心もとないものがあり、あくまでも平時のみを想定して設定している基準と考えざるを得ない。

少なくとも舞台芸術関係の公益財団法人については、今後はこういった制限を撤廃して平時から財務体質の強化を図ることを奨励するとともに、前述の資本金劣後ローンの導入をはじめとする中長期的に安定した財務基盤を構築しうる仕組みの導入、さらには多くの場合公益財団法人制度とセットになっている指定管理者制度の在り方等、その運営の実態に即した現行制度全般の抜本的見直しを検討されるべきと考える。

### 〈芸術団体への運営費助成〉

我が国における芸術団体・文化施設に対する公的支援は事業助成という仕組みが原則となっている。事業助成は事業が予定どおり実施されることが前提となっている平時を基準とする

制度である。一方、団体等の運営は、今回のように不可抗力によって事業が次々と中止に追い込まれ、経営的な負荷が増す中であっても、休むことなく継続されなければならない。今後は、運営費を対象にした助成も選択肢の一つとして、例えば状況によって事業助成を運営助成に切り替えられるシステムなど、緊急事態に陥った団体等の救済に資する支援のあり方も早急に検討されるべきと考える。

### 〈文化芸術に対する国民全体の理解〉

オリンピック・パラリンピック東京大会の開催年を迎え、我が国の舞台芸術も華やかにこれに彩りを添えつつあるように見えていたが、ひとたび感染症が全国に広がるや、たちまちにして社会の実演芸術活動に対する視線に厳しい一面が加わったことを実感した実演家・スタッフは少なくない。舞台芸術は今日最も避けるべき“三密”の空間で行われる“不要不急”の催事として、社会から排除された感すらあった。無論多数の舞台芸術愛好家や心ある国民はこの状況を残念な思いで見つめていたことと思うが、舞台芸術を積極的に支持し、擁護する発言等が我が国の政界・言論界等にも必ずしも多くはなかったことも事実である。こうした社会の厳しい反応は、我が国の国民全体の舞台芸術に対する理解が未だ必ずしも十分深化していないことのひとつの表れと受け止める必要があり、今後はより一層舞台芸術と多くの国民との社会的・心理的距離を縮めていく努力を続けなければならない。

### ■ After / With コロナ時代を生きるために

#### 〈平時と非常時〉

SARS、MERS、新型コロナウイルスと続き、今後も新たなウイルスによる感染症は次々と世界を襲うことが予想される。また、地球環境の悪化に起因するとされる世界的な異常気象も深刻さを増しつつある。加えて、我が国には予てより大地震の危険も指摘されているところである。このような舞台芸術を取り巻く環境の大きな脅威に思いをめぐらせる時、芸術団体や文化施設の運営のあらゆる面において非常時を想定したリスクマネジメントの構築はいまや欠かせないところとなっている。今回の新型コロナウイルス感染症対応の中から生み出されたさまざまな教訓を今後に生かし、検証結果やガイドライン等はレガシーとして継承されなければならないと考える。

劇場・音楽堂にあっては、イベント中止に係る保険において感染症が対象となっていなかったことが問題として指摘された。前述のように、感染症は今後も避けられない脅威となることが予想されるため、感染症も不可抗力の一つとする保険の開発が望まれる。

また、舞台芸術に対する支援のあり方についても、さきにふれたように平時のみならず非常時に移行した際にも有用に機能しうるシステムを検討する契機として、今回の感染症対応の経験は生かされなければならないと考える。

#### 〈プライドと責任感を持って〉

今回“不要不急”という言葉にいたたまれない思いを抱いた舞台芸術関係者も多かったと聞く。人命優先という大命題の前に、自身の活動の価値や存在意義に疑念を抱いたり、肩身の狭い思いをされたりした方も少なくなかったことと思う。しかし、人の命が今日まで大切に受け継がれてきたと同様に、芸術や文化も、人類の誕生とともに創り出され、人類の歴史とともに育まれ、大切に発展させてきたものである。私たちはこの先人から受け継いだ芸術や文化という人類の存在に不可欠な宝を、現代において継承している者であり、やがてこれを次の世代、その次の世代と、私たちが顔を合わせることもない未来の人類に受け渡していかなければならない責務を担っている。本学会は、コロナ禍の時代にあって、経済的にも精神的にも苦しい思いを抱えているすべての舞台芸術関係者の皆さんに、是非自らのプライドと責任感を失うことなく、この厳しい時代を乗り切っていただきたいとエールを送るものである。

#### 〈夏の研究会を終えて〉

本学会は、冒頭でも触れたとおり、新型コロナウイルス感染症が拡大する中、舞台芸術関係者の皆さんの苦悩や悲嘆に寄り添いたいという思いから、先の要望書をまとめ、文化庁に提出した。次の段階としては、今回の夏の研究会で得られた成果を踏まえて、具体的な政策提言等をさらに進めていきたいと考えている。文化庁にはこれからも先頭に立って強力に旗を振っていただくことを期待したい。そして、本学会も力強く連携して、その後押しをしていきたいと考えている。

## 分科会1 「オーケストラ」

2020年7月27日(月)19:00~21:30

オンライン開催

### [報告]

国塩哲紀	東京都交響楽団 芸術主幹
辻敏	東京交響楽団 常務理事・事務局長
中川広一	札幌交響楽団 総務・営業部次長
二宮光由	大阪交響楽団 楽団長・インテンダント*
山元浩	名古屋フィルハーモニー交響楽団 演奏事業部長

### [司会]

西田紘子	九州大学大学院芸術工学研究院 准教授*
------	---------------------

### [オブザーバー]

石田麻子	昭和音楽大学オペラ研究所 教授/JaSMAM 理事、編集委員長*
------	----------------------------------

※敬称略・五十音順/\*は JaSMAM 会員

## 論点整理 【西田紘子 (司会) によるまとめ】

### 【現状】

- ・ 2月末から、自主公演・依頼公演だけでなく、音楽鑑賞教室など地域・教育プログラムのほとんどが中止や延期
  - ・ 年内のチケットは一括払い戻し、開催できる場合は再発売(都響)
  - ・ 損失額は億単位
  - ・ 全国からの寄附、財団や国・自治体からの補助金でしのいでいる
- 自粛中(それ以後も含む)
- ・ 子供たちや医療従事者への動画、過去の公演動画・録音を公開(都響)
  - ・ 映像配信プロジェクト、吹奏楽ワンポイントアドバイス、クレジットカードによるオンライ



ン寄付、クラウドファンディング、パトロネージュ会員、払い戻しせずに寄附(札幌)

- ・ オンライン寄附、払い戻しせずに寄附(大阪響)
- ・ オンライン会議、Instagram 開設、賛助会員の申し込み(名フィル)
- ・ 事務局いったん休室、オケ関係者で情報交換、一番最初にライブ配信(東響)

#### - 再開に向けて

- ・ 都響モデルを検討、飛沫計測を実施、試演を公開。「行程表と指針」(日本語版/英語版)を策定、ホームページで公開(都響)
- ・ 出演者に PCR 検査を実施(大阪響)
- ・ ホールとホールユーザーのオンライン意見聴取会、愛知県内 4 オケで情報交換会(名フィル)

#### - 再開

- ・ 7 月、休憩なし 1 時間公演(都響)
- ・ 8 月から再開予定(札幌)
- ・ 7 月に再開、横 1m・前後 1.5m(大阪響)
- ・ 7 月に再開、休憩なしの 1 時間公演、感染対策を自治体など皆で検証、ライブ配信(名フィル)
- ・ リモート指揮による自主的音楽づくり、来日できるよう厚労省など各方面に働きかけている(東響)

#### 【課題】

- ・ 財政は緊急事態、自主運営のオケほど大変
- ・ 財政面(借入)、資金繰りの対策、経営の性質(内部留保があまりもてない)、やればやるほど赤字、第 2 波が来たら厳しい、事業補助のあり方、新しいことがやりにくい、補助金が減額されないように努める
- ・ 公益法人制度の見直し(こうした危機の際に一気に財政的窮地に陥るため、文化芸術団体になじまないのではないか)、文化芸術法人の必要
- ・ 今後も SNS の活用
- ・ 有料配信の収益や、配信からの寄付金
- ・ 新しく始めた試みをいつまで続けるのか、続けることは可能なのか
- ・ 入国制限で海外の演奏家が来られない、出演者に偏りが出る

- ・ 海外のアーティストの行き来が難しい
- ・ 完成された形を持つオケの場合、新しい生活様式に適應するのは容易ではない
- ・ 大規模な合唱付き作品は難しい、演奏内容に偏りが出る
- ・ 演奏以外の商品(手間と収入、継続性)→アイデアが必要
- ・ PCR 検査の方法の拡充
- ・ PCR 検査のコストと継続性、タイミング(合唱付き作品の前など)
- ・ どの検査方法を用いるか
- ・ 陽性者が出た場合の対処
- ・ 入場者制限緩和が延期された
- ・ 入場制限の上でチケットを再発売しても、完売にはならない、依頼公演は特に厳しい
- ・ お客さんの戻りが悪い、入場可能者の半分くらい
- ・ 公演数は通常の年より半分程度になりそう
- ・ 文化庁の巡回公演など国内移動についての判断が難しい
- ・ リハーサルや休憩中、レッスン中のソーシャルディスタンス、3密の避け方(ドア全開、天井を高く、定員を半分に、時間短縮、客席に下りない、など)→楽団間の情報共有が大事
- ・ 助成金申請の予定が立たない、先の予定が立てられない
- ・ 来年度の企画についてゼロベースで見直す必要
- ・ プロジェクト助成制度の見直し、まず声をあげる必要

→音楽の世界のリーダーとして先導する必要

#### 【要望】

- ・ 換気性能やリハ中・休憩中の対策の確認→ホールや自治体、フランチャイズ先との連携や情報共有が必要
- ・ 補助金制度を with コロナ時代に沿ったものに
- ・ 国の方針の必要
- ・ 公益法人制度の見直し

## 分科会 2 「アーティスト」

2020年7月29日(水) 19:00~21:30

オンライン開催

### [報告]

- 入山功一 株式会社 AMATI 代表取締役社長  
関鎮京 北海道教育大学岩見沢校芸術文化政策研究室 准教授/JaSMAM 理事\*  
本山秀毅 合唱指揮者/大阪音楽大学 学長  
渡邊悠子 特定非営利活動法人みんなのこぼ 代表理事

### [司会]

- 堀田栄作 公益社団法人関西二期会 事務局長/JaSMAM 理事\*

### [オブザーバー]

- 壬生千恵子 エリザベト音楽大学音楽学部 教授/JaSMAM 幹事\*

※敬称略・五十音順/\*は JaSMAM 会員

## 論点整理 【堀田栄作（司会）によるまとめ】

### 【まとめ】

1. コロナ禍でアーティストが活動の場を失っていることに対し、より大きな枠組みをもって業界全体で取り組んでいくことが重要である。
2. コロナ禍は音楽活動のもつ本質的な社会的意義を考える契機ともなっている。
3. アーティストのメンタルに関する窓口は、今後非常に大切になっていくことが予想される。
4. パンデミック・レガシー(次の時代へ)について考えることが大切である。(基本的にすべてが変わらざるを得ない状況にある。以前に戻したいし、戻りたいが、既に変化は始まっており、前向きに変化させていく必要がある。)
5. リモートや映像配信は演奏会のみならず教育の場でも必須のものとなっている。音楽系大学はどのように対処していけるかが問われている。

## 【現状と課題】

### ※ アーティスト達の心の課題

- ・ アーティスト共通の思いとして「練習はしているが気持ちがついていかない」、「創作発表の意欲が湧かない」という声がある。
- ・ メンタルに関する問題はこれからの創造活動において、非常に大きな意味をもつ。音楽家特有のメンタリティには「自己鍛錬力」や「自己肯定感」の強さなどがあげられるが、活動や発表の場を失っていることは、今後、大きな影響を及ぼすと思われる。創造的社会の維持のためには、メンタルに関する窓口は非常に大事だと感じている。

### ※ 実際の支援という現状と課題

- ・ 現時点では、アーティストは個々の動きと努力で支援を得ているが、観光業界の GO TO のように業界全体である方向に向かって動きがあると心強い。
- ・ 現場の意見を聞いて行政と連携する組織が必要である。
- ・ オンラインだけではなく新しい生活様式に即した音楽活動への支援が必要ではないか。
- ・ フリーのアーティストには、収入源や活動の相談窓口がすぐには思い浮かばない。専門家を配した公的な窓口が必要である。

### ※ 演奏活動に関しての現状と課題

- ・ オンラインは普及しつつあるが、直接音楽を聴いて欲しい。それを可能にする科学的なエビデンスや具体的な方策がさらに現場には必要である。
- ・ 劇場等においては、座席を空けなければならないという課題と経営との両立をどうしていくかが喫緊の課題であり、ガイドライン・対策のそれぞれについて正確な根拠・理由を知ることが大事である。
- ・ 専門家の監修を得て徹底された中で演奏会が行われ始めていることは、大変な励みになっている。一方、アマチュア合唱団においては同様のペースとは行かず、再開に向けて模索中である。歌うことは人々の根源的な音楽活動のひとつであり、「集団」で「大きな声で歌う」ことが抱えるリスクをどうしていくかを、考えていかなければならない。

## ※ 音楽大学の現状と課題

- ・ 各音楽大学ではリモート授業等に既に取り組み、様々な工夫がなされている。他方、実技系のレッスン等では、専門教育の質を保つために大学がどう対応していけるかを問われている状況である。
- ・ 十分な感染防止対策をとって全面的に対面授業が再開された大学(発表事例にあった大阪音楽大学、エリザベト音楽大学等)もあるが、地域によって対面授業の実施の可否が異なる現状がある。
- ・ 音楽大学卒業生の相談窓口についても課題である。(情報面・メンタル面双方で準備をしている大学はあるが、まだ準備段階。)
- ・ 地方においては特にアーティスト・音楽団体と行政、ホール、そして音楽家を養成する大学等教育機関の連携が重要である。
- ・ 上記問題について、大学として学生を社会に送り出す責任を感じる。

## 【With/After コロナ】についての様々な意見

- ・ コロナパンデミックにおける次の時代へのレガシーは何か？を考えることが重要。
- ・ 後に振り返った時に、コロナで変わった副産物があるはず。
- ・ コロナがもたらしたものとして、娯楽への補償を求めることに対する批判が顕在化した。しかし、これ(音楽活動)はむしろ幸せへの道しるべと捉えたい。(3/16の補填要望)
- ・ 合唱はテクノロジーとは対極にある、という事実気付かされた。ウィズコロナの合唱活動について考え続けていかねばならない。
- ・ 素晴らしい公演に観客の居ない虚しさに、「新しい生活様式」が入り込む余地は無いと考える。一方、クラシック音楽領域では限られている選択肢の中、「動画配信」を積極的に楽しむ方向へと変化している。目的別に生の演奏会と併存する動画配信に期待したい。
- ・ 映像(オンライン)が既に進んでいる状況から、アーティストと同様に、お客様にとっても「演奏会が人生に欠かせないものであった」と見つめ直すきっかけになっているかも知れない。
- ・ METのライブビューイングのようなことは、これまで日本ではやっていたなかった。コロナ以降は日本でも進む可能性がある。
- ・ 映像に付加価値をもたせれば生を観たあとでも「映像で見たい」という事が起きると想像する。

- ・ アーティストマネジメントの本質・存在意義について「元に戻りたい」という思いが基本にあるが、変わらざるを得ないのではいか。

**【各発表者から一言】**

関さん …… 現場と政策が乖離していることが今回判明。行政の論理だけで政策を作ることがないように。

渡邊さん …… アーティストの「表現」に触れることで子どもの心は豊かに育つ。活動を途切れずに進めていける方法を模索し続けたい。

本山さん …… 一つ一つの事態に丁寧に向き合い、物事の本質を見極められる大切な機会と考え、進む。

入山さん …… 置かれる立場により分断の可能性。この状況下ではクラシック音楽界で足並を揃えることが大事と訴えたい。

### 分科会3 「劇場・音楽堂」

2020年8月4日(火)19:00~21:30

オンライン開催

#### [報告]

高野裕子 京都コンサートホール事業管理部事業企画課 係長\*  
永井健一 神奈川県立音楽堂 館長/JaSMAM 理事\*  
古屋靖人 兵庫県立芸術文化センター 事業専門員  
水野学 愛知県芸術劇場 シニアプロデューサー

#### [司会]

梶田美香 名古屋芸術大学芸術学部 教授/JaSMAM 幹事\*

#### [オブザーバー]

森岡めぐみ 住友生命いずみホール 次長/JaSMAM 理事、企画委員長\*

※敬称略・五十音順/\*は JaSMAM 会員

## 論点整理 【梶田美香 (司会) によるまとめ】

### 【現状】

#### <中止>

- ・ 緊急事態宣言前から、事態の詳細がわからない中で少しずつ中止してきた。(京都コンサートホール)
- ・ 県独自の緊急事態宣言による中止もあったが、法的根拠に基づいていないことによるトラブルもあった。(神奈川県立音楽堂)
- ・ 貸館事業はほぼストップしている状態が、未だ続いている。損失額はそれぞれ異なるが、ウエイトの高い事業だったので、決算に大きな影響を与えることになる。(全館)
- ・ 自主事業もほぼ中止となり、自らで創ったものを壊す作業が繰り返されている。(京都コンサートホール)

- ・ コロナ禍を受けての中止公演数は、現時点で各館以下のとおり。
  - 京都コンサートホール:2020年度に予定していた主催・共催事業 47件・アウトリーチを含めると77件のうち、中止45件、延期9件。半分以上が実施できていない。
  - 神奈川県立音楽堂:2月～8月の中止・延期公演数94件、うち主催事業7件。
  - 兵庫県立芸術文化センター:2月～今年12月までで382公演以上(自主公演・楽団公演・貸館公演すべて含む)が中止・延期の見込み。年間事業数の半分近くにのぼる。
  - 愛知県芸術劇場:2020年度の公演のうち198件がキャンセル、うち主催事業18件。
- ・ 海外ものはほぼ中止、アウトリーチも中止(京都コンサートホール)

#### <再開>

- ・ オンラインでの配信の試みを始めている。(全館)
  - いつもよりも広域発信ができる
  - 劇場に出かけるのに抵抗のあるお客様には適した方法
  - 今後、予測される災害への対応としても使える
- ・ 通常の劇場公演に比べて、多エリアからの参加者を獲得できることもある。(全館)
- ・ 通常公演も少しずつ再開しているが、対策は手探り状態にある。(全館)
  - サーモグラフィーの設置(37.5度以上の来場者への対応)
  - 舞台上の人数制限と感染対策
- ・ その結果、プログラムの画一化が起きている(全館)
- ・ 「友の会」「優先予約」対応まで手が回らない。(全館)
- ・ 職員の収集する情報に頼るだけでは不十分なので、専門家の検証が必要と考え、専門家(医学・工学)に検証を依頼し、その結果を情報公開している(兵庫県立芸術文化センター)
- ・ 公演開催にあたって劇場としての実施条件を打ち出す予定(神奈川県立音楽堂)

#### <意識>

- ・ 劇場で働く全てのスタッフの熱意に感謝している(全館)
- ・ メンタルが弱っている部分はある(全館)



- ・ 無理に進まない意識を持ち続ける・・・再開ありきにならないように留意(兵庫県立芸術文化センター)
- ・ 目の前の課題をクリアしていくことしかない(兵庫県立芸術文化センター)
- ・ 中止も再開も、社会的意義に目を向けなければいけない(兵庫県立芸術文化センター)

#### 【課題】

- ・ 劇場運営を支える貸館事業がストップしているので財政的な苦しみの規模が大きい(全館)
- ・ 先が見えないので、次年度計画が立てられない(全館)
- ・ アマチュア団体の活動が行われていないことの、貸館事業への影響が大きい(神奈川県立音楽堂)
- ・ いつまで、現在の状況が続くのかがみえない(全館)
- ・ 中止の決定が日程だけに依存し、関わる一人一人の思いが尊重されない。このことが再開でも同様に起きている(兵庫県立芸術文化センター)

#### 【今後の試み】

- ・ 域内の小規模劇場との連携を考える必要は感じている(兵庫県立芸術文化センター)
- ・ 同様に、実演団体や実演家との連携も必要だと感じている。(京都コンサートホール)
- ・ 無理をしないで、少しずつ進む。前の見えない登山だという意識がある。(兵庫県立芸術文化センター)

#### 【分科会 3 を終えて (梶田美香)】

分科会 1 と分科会 2 において、オーケストラとアーティストを取り巻く状況が発表されてから開催された本分科会では、実演家や実演団体の活動、活動を通して得られる経済、活動の前提となる健康を守る責務が劇場、音楽堂にあることが議論のスタートとなった。その表れであるかのように、登壇者の所属する館では、手探りの中とは思えないほどの綿密な対応がなされているように感じられた。

しかしながら、文化芸術の存在意義がこれほど問われる機会を数多くは経験しておらず、ゆえに、苦境に立ち向かう際に、そういった広い視野からの模索に至らず、目の前の具体的なノウハウからスタートするのが実態であり、社会と文化芸術の関係性への思いを活動再開と結び

つけることの困難さもまた感じた。そして、このような事態には、当事者の努力や愛好家の熱望だけではなく、文化芸術に対する社会の後押しが必要であることも痛感した。苦難に満ちた今の日々が、今後の劇場、音楽堂の力になると信じたい。

日本音楽芸術マネジメント学会第12回夏の研究会

「After / With コロナ時代を生きる～音楽で明日の社会をひらくために」論点のまとめ

2020年9月発行

問い合わせ先 日本音楽芸術マネジメント学会事務局 jimukyoku@jasmam.org